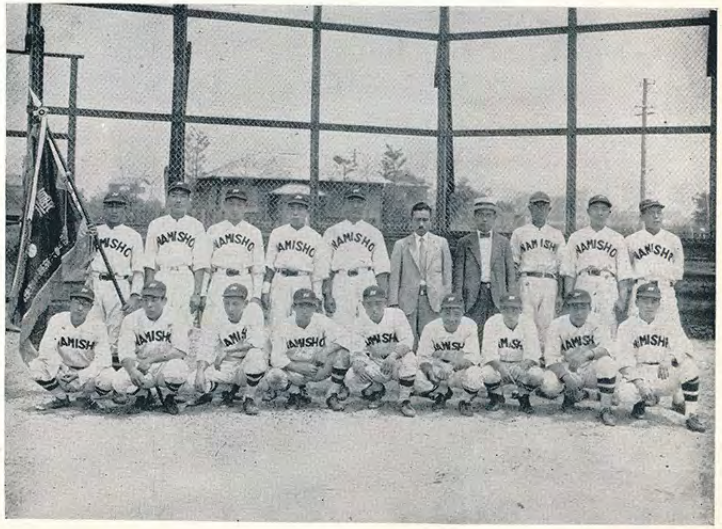
昭和十二年の日支事変に端を発した日本の悲劇、忌わしい大戦に不幸な犠牲者として死没した選手は昭和十年卒を中心にこの前後が最多である。

磯野・山岡・（昭九）納家・水撒（昭十）常念・善斎・土井（昭十二）北之坊・萩・福居（昭十三）田中・村松・京井（昭十四）木村・宮田（昭十六）荒尾・石井（昭十七）。

列挙すると甲子園での活躍が想起され、痛切哀悼にたえぬものがある。謹んで瞑福を祈る。

近畿中等学校大会優勝旗

鳥丸主将近畿大会優勝旗を受く（緑ケ丘球場）
— 昭11. 6. 14 —



近畿大会優勝記念撮影（津守日紡グラウンド）
（前列左）馬淵、杉本、京井、香川、平古場、善斎、田中、村松、萩（後列）鳥丸主将、小西、常念、土井、堀井、野田校長、杉本部長、戸川、春永、福居

巣立つ七選手（昭一二・三）
（左より）善斎、春永、土井、鳥丸、常念、馬淵、堀井

村松投手は大阪初の全国優勝をもたらした殊勲投手である。彼の球を剛球とはどの角度からもいえないが、打たせてとらす、先ずは軟投型投手に属する。〃えべっさん〃の愛称に違わず春風駘とう、人徳が自然備わったから選手間の摩擦もなく、チームウォークも最良であった。全国制覇達成の原因も、あるいはこの辺に依存していたかも知れない。

飛行機事故で戦死。

第十四回選抜大会優勝投手村松長太郎君（昭一二・四）

↑ 第十四回全国選抜大会出場記念バック ル（藤井浩祐作）

↓ 選抜記念旗を握りしめて（本校福居，市岡，松井両主将）昭一二・四

和商小林遊撃（不戦一勝・二回戦・対和商）
―昭一二・三・三一

入場パレード（先頭福居主将）
―昭一二・三・二八

本校勝機漸く濃し（対下商戦・六回裏走者三塁セーフ）四・二

本校田中、六点目の生還（準決勝・対徳島商戦）四・三

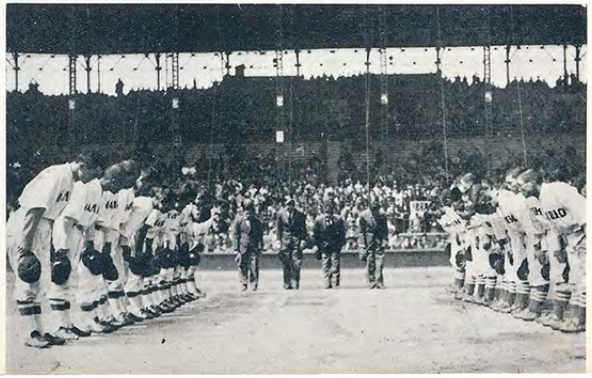
昭和七年以来昭和十二年まで選抜大会六回連続出場。この年遂に宿願の全国優勝成就。すべて地元では新記録である。

優勝はどうして可能であったか、私見では一に攻守の均衡がよく保たれていたこと、優勝チームの守備はいうなら百万弗のそれで、おそらく本校では今日までの最上級に属しよう。これに依存し、安んじて村松の打ち取るピッチングが奏功したと見る。遊撃平古場・三塁京井の堅陣は中でも水際たっていた。攻撃面でも頭抜けた長打力保持者こそなかったが、何番からでもチャンスを作れるムラのない打線が有力であった。更に選手の得失を知悉する先輩本田監督の采配振りといい、策戦といい、実に明敏、いわば選手の手と監督の頭の綜合力が優勝に導いたといえよう。

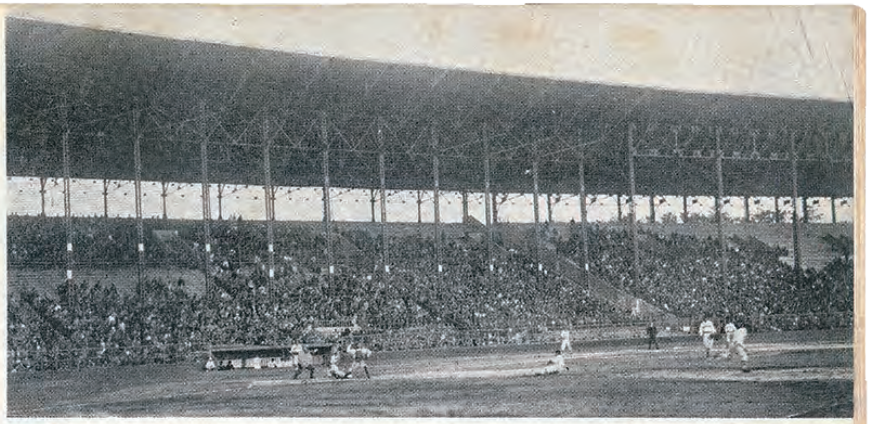
緊張裡の抽籤（円陣右の学生服が綿谷マネジャー）

久邇三宮殿下来場、優勝戦開始に先だち両チームの挨拶に答礼（四・五）

優勝戦直前の両主将握手（本校＝福居・中京＝松井）



いざ戦わん！（左本校・右中京）
―昭四・五―



↑ 幸先よき先制得点（優勝戦）二回，本校杉本とのスクイズ成功して萩生還，最初の一点に意気上る

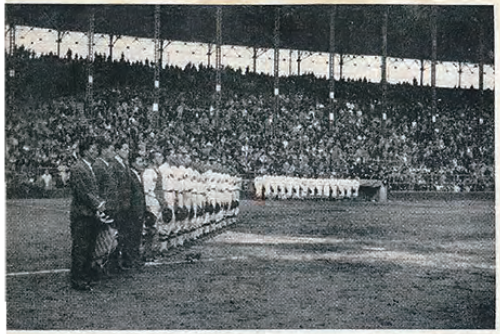
優勝戦は奇しくも中京商とさみえた。

中京は大会随一という野口投手を擁し、下馬評は四分六、又は七三ときで踏むものすらあった。大会とは皮肉なもので、優勝意識にとらわれて野口投手が固くなる。本田監督これを看取して「今日の野口は打てる」と託宣を下した。

二回、先づ萩に安打が出て田中のバントに一挙三進。正に浪華の足である。次打者杉本2—2と追い込まれたが、野口の意表をつくベンチの一か八の独行バント策奏功して先づ一点。四回、自信の動揺を来した野口は二四球にピンチを招き、次打者萩は三回バント不成功後、左中間を破って野手の本投及ばず戸川加点これを守り通し、一方村松は逸る中京の加撃タイミングを巧みに外し、得意の重殺に退けたりしてシャットアウト、春空に優勝のサイレンは高鳴った。

↑ 同上シーン＝望遠撮影＝（中京　松井捕手）

戸川生還、更に一点を加う。四回、四球進塁の戸川、萩の二越安打に勇躍加点。←



（上）感激の一とき（校歌吹奏裡に校旗掲揚）審判（手前より）天知、橋本、伊達、野本四氏（下）歓喜はニュース・カメラに収められて

宿願達成！

（前列左）*田中、平古場、*萩、*村松、*宮田
（後列左）巻野、*北之坊、香川、戸川、*福居、小西、*京井、杉本、竹田、島田（*印故人）

← 選抜大会優秀選手賞（戦前）と優勝メダル

第十四回選抜大会授賞選手として、本校からは左の諸選手がそれぞれ入賞し、ブロンズ製打者像を贈られた。

【優秀選手賞】

村松投手、福居捕手、戸川二塁手、京井三塁手、平古場遊撃手、萩中堅手、田中左翼手

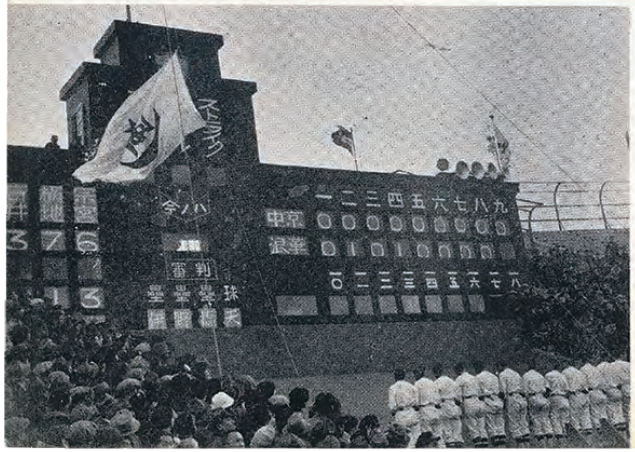
【美　技　賞】

小西一塁手（和商・下商・徳島商・中京商戦に内野手より種々の送球を鮮やかに処理したプレー）刺殺2、補殺2、失策0、守備率一〇〇、併殺7

→ 戦塵おさまる（左は中京・本校左より福居主将、萩、戸川、小西、京井、杉本、村松、平古場、田中、香川、宮田、北之坊、竹田、巻野、島田）

↑ 足取りも軽く大会旗降下に行進

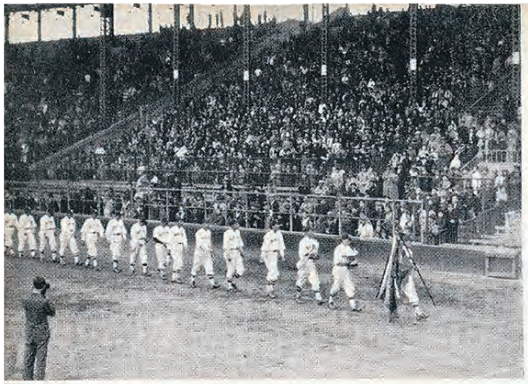
↓ 栄えの優勝校校旗は我がナインによって静々と降下される



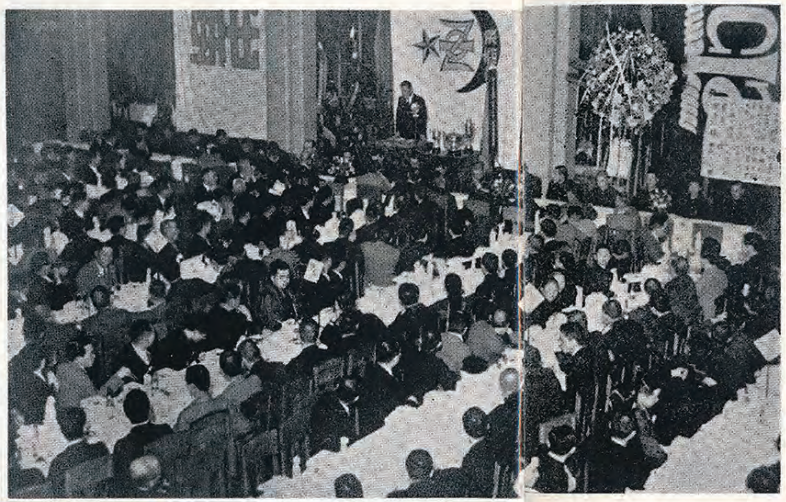
優勝祝賀は公的では先づ大阪ホテルでの坂間大阪市長の設宴、主催側毎日新聞社の祝賀午餐会、学校は昼間生の旗行列――扇町公園から市庁を経て毎日新聞社。

夜間生は提灯行列で地元の淡路を中心に学校界隈を練り歩いた。

次いで同窓会主催の下に、四月十日、中央公会堂で祝賀の夕を。鈴木毎日運動部長、佐伯大会最高委員、湯浅禎夫氏に赤間知事（当時学務課長）も来席の上それぞれ祝辞を述べられた。



スタンドの歓呼裡に場内一周



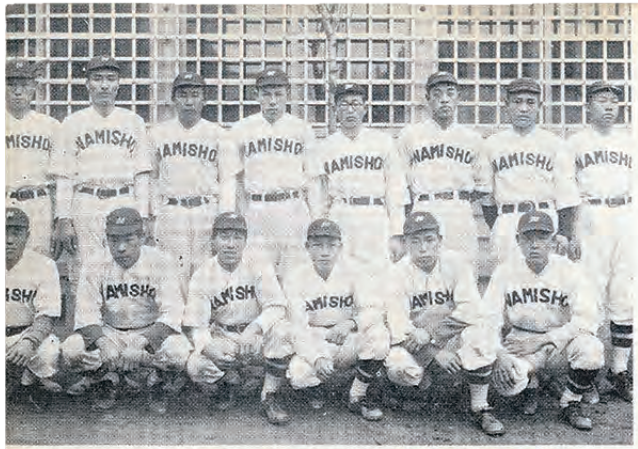
選抜優勝祝賀会（四・一〇）
壇上祝辞を述べるのは湯浅毎日新聞運動部記者
（大阪中央公会堂ホール）

私の隣席がたまたま球界の名士、青井鉞男氏（有名な元一高投手）であった。在校生父兄とはいえ、まぶしい存在だが全国優勝に導いた福居主将の人柄と統率振りを讃えられ、小著の十年史に好評を頂いたのも忘れ難い。

↓ 夜間部生徒会主催の祝賀提灯行列
（本校々庭より出発直前）

全国選抜大会優勝レプリカ
（戦災焼失）

↑ 同前（戦後再授与）



↓ 平安に4—3で惜敗“来年又来いよ”の声に甲子園をさる
第二十三回全国中等学校優勝大会第一回戦（昭一二・八・一二）

甲子園球場外野壁の優勝校表彰板

（左上）昭和十三年度選手記念撮影
（前列左）平古場、杉本、田中、木村、浅野、後藤（後列左）坂元、小西、村松、京井、宮田、岸本、大鳥、竹田

（左下）平古場左越安打を放つ（昭一三・三・三一）
第十五回全国選抜校大会第二回戦・滝川中（滝川坂井補手、球審角田氏）

第二十三回全国中等学校
優勝野球大会参加章
（長谷川義起作）

優秀選手賞を掌上にして
（前列左）萩、平古場、村松、田中
（後列左）小西、戸川、福居、京井

昼間部生徒会の祝賀旗行列
大阪市庁前の歓呼—四・八

↑ 優勝チーム綿谷光次マネジャー